



春燈

9 月号

September 2011

主宰の句

安立公彦

過ぎやすき旅の時間や夾竹桃

蚊遣して敦忌ひとり修しけり

菊坂に一葉を訪ふ梅雨晴間

焼酎は故山のかをりはらからよ

夏果つや天に被曝のこゑ残し



安住敦の句

玉藻前雲居晴衣

天高く宙乗りもまた高かりし

『柿の木坂雑唱以後』昭和六十一年

先生晩年は、俳人協会要職に加え、朝日俳壇の選者を務められ、昭和六十一年には、歌舞伎座の番付の見開きにその月の演目にかかる句を寄せられた。この御多忙が先生の命を縮めてしまった。先生には身辺句が多いが、掲句のように実に大らかな句もあって、私は「宙乗り」の場面に遭遇すると心の中でこの句を唱え、大いに楽しんでる。そして先生は演劇通であられた、と――。

橘 正義

何もかも過ぎたる萩を括るかな

『午前午後』昭和四十五年

敦先生の作品には、萩が多く登場する。萩は万葉集にもいちばん詠まれている。風に揺れる趣、雨にけぶる風情、さらには咲き終わった萩を括るまで、あらゆる場面でしみじみと詠い上げる。

万太郎亡き後、四十年には、木下夕爾も失う。へ手に負へぬ萩の乱れとなりしかな、萩の乱れは己が心の乱れ。掲句はそれから五年、おだやかな心情の滲む一句。

割田容子

燈下集



○ 見田英子

背負はれし児も手をかざす盆囃
盆の月いづこへ失せし地震の街
花栗の香りを運ぶ瀬々の風
蟻の列日照雨の中を輝きて
羽抜鶏一羽遅れて急ぎけり

○ 白杵游児

父の日や明治の父は巖父たり
でで虫やゆつくり生きて傘寿越ゆ
霊園に誰が魂恋ふや時鳥
花魁の起請文かも落し文
蜘蛛の囀に雨しきりなる我鬼忌かな

○ 岩永はるみ

眼指のいつも子を追ふ白日傘
手びさしの白き灯台若葉風
夏蓬夕ぐれ燃ゆる海の色
すれちがふ麦藁帽の日の匂ひ
手花火の果てたるまでの祈りかな

○ 江草礼

北国に夏来オロオロ歩きかな
想定外多き余生や蟬時雨
虹虹と指の先より消えにけり
湧水の虹色回す水車かな
重馬場や馬の汗拭く大夕オロ

○ 林 紀 夫

明易や陶師ほむらに語り掛け
浮人形子供の夢の膨らみぬ
蚊喰鳥隧道風を生みにけり
吊忍老舗そば屋のつゆ辛し
夕立や土地勘のなき駅に立つ

○ 割 田 容 子

父の日の父との距離を楽しみぬ
葛切や人情継ぎて四代目
羅の風の往来城址能

不自由を楽しんでゐる根無草
人の輪の遠くにありて水中花

○ 小 泉 貴 弘

薔薇燃えて空の青さを引き立てり
鐘楼に翹たたみをり梅雨の蝶
梅雨晴や白き帆船壇の中
白樺の若葉はるかに武甲山
担ぎ手も神も酔ひしれ荒神輿

○ 戸 辺 信 重

ひとしきり騒ぐ子に餌つばくらめ
父の日や散歩の帽子新しく
折られてもなほ咲き昇る立葵
釣果問ふ声きき流す蘆の風
束の間の晴れ間高々雲の峰

○ 中 野 さ き 江

突つ走る強気の構へ羽抜鶏
水中花生死のなきはあきたらず
風鈴や細き格子のをんな店
恋に紆余風に量感梅雨あがる
無住寺に落ちてしまひし蛇の衣

○ 成 田 な な 女

もて余す物を貰ふや雛燕
打ち寄する波音高き夏隣
藤古りて軒端を伝ひ花ざかり
一杓の釜音鎮む風炉手前
蛭や高野聖の迷ひ橋

当月集

安立 公彦選



○ 川崎真樹子

日盛に暁の落とす影のあり

熱帯魚悲観楽観交錯す

埋められぬ心の溝や蔦茂る

羽抜鳥風のあはひに身を細め

時といふ万能葉や浮いて来い

○ 矢口笑子

ジープの堅き乾きや信長忌

通り抜け無用の路地や雷走る

ヒロインになりそこなひし扇子かな

土用太郎岩に噛みつく波頭

海暮れて心許なき素足かな

○ 石田康明

ひよつとしていまが逝きどき若葉風

山法師が綺麗よと妻二階から

扇風機愚痴は聞かぬと首を振る

西日濃かり浪人の日の三疊間

契されよ炎帝荒ぶこと無しと

○ 中村紀美子

名刹のたれもぬ昼白牡丹

いづくより梶子かをる薄月夜

白猫のまつすぐに行く梅雨の月

潮風を真つ向に受け枇杷青き

夏至夕べまだ灯のつかぬ浮灯台

○ 小山繁子

朝刊の梅雨の重みを受けとりぬ

園児らの声の高さに立葵

青芒雨寄せつけぬ勢ひかな

水無月や風ある路地の夕明り

羅のうすむらさきを衣架に掛け

春燈の句

安立 公彦選



梅雨寒の夕べ乾かぬ髪のは

神奈川 宮崎 紗伎

髪染めて華やぐ街を梅雨の雷

失言の咎許されず梅雨の雷
二階から虹見に来いと夫の声

帯を解くためらひすこし桜桃忌

衣更へて子らに齡を聞かれたり

巴里祭切子の壺に小銭ため

菖蒲田へ竹の手摺の橋渡る

俳や鶴来師粋な夏帽子

埼玉 茂木 なつ

海越えて誕生力ード届く朱夏

日盛の雲立上る速さかな
月涼し金箔走る波の上

卒寿とよ子等に感謝のビール注ぐ

東京 池田 節

赤城山の稜線はるか青田道

去りがたき鳳作句碑や岬朱夏 (錦江湾)

兵庫 川端 正紀

知覧なほ昭和を抱く蚩かな

淡き紅さして狭庭の下野草
ユリの木の花咲く苑や写楽展

涼しさや千年杉の香を削り (鹿児島)

東京 高木 曾精

五月雨に一步も引かぬ湯けむりや

夏蝶の身の置き処なき翅使ひ

土用芽の無骨に天を仰ぎけり (霧島温泉)

埼玉 大文字孝一

優曇華や「無題」と名ある抽象画

金色の蕊も妖しき美女柳
あるかなしの風呼び入れて絹団扇

余言

安立公彦

「秋の風吹く」に、女性らしい想えを聞くことが出来る、と書いています。

掲出句はその「恋ころ」という伝統を今に引く。簾が「絵すだれ」になり、「恋の句」も一段と艶めく。

竹皮を脱ぐ身の程は知りにつけり
松橋 利雄

周知の通り作者は今夏句集『光陰』を上木した作者の俳歴からみると、三二六句という掲載句数は如何にも少なすぎる。おそらくそれは全句数の一割ほどだろう。しかしそれが句集を編むということなのだ。

自戒をこめて言えば、俳人は句集を世に問うて初めて「俳人」と言えるのではないか。文字通り「竹皮を脱ぐ」である。それを作者は「身の程は知りにつけり」とする。それは全くの謙譲である。

皮を脱いだ竹は一段と逞しく成長する『光陰』を未見の方は是非購読されることをお奨めしたい。充実した作品は必ずや読み手の共鳴を得る。

鮎を焼く清けき夕べありにつけり
井上 春子

作者は長い病臥の中から昨年退院されたじかし毎月の句を拝見すると、退院のあとも病いはまだ残っているかのようだ。それは同時発表表の、〈敦忌や幻の虹見えぬ眼に〉の句からも

牡丹散り寂寞とある余曰かな
植田 利一

愛憎限らない牡丹が散った。改めてもの寂しいひそけさが身を包む。その寂しさの背後には、「余曰」という人の世の虚しさが広がっているのだ。

この句の前に、〈牡丹見てゐる間も人は老いゆくか〉という安住先生の句を置くと、改めてこの句の良さが納得されよう。それはまた、豊麗な牡丹の姿をも連想させる。

絵すだれの陰に恋の句書き止むる
柴崎 富子

「簾」と「恋の句」並べると、万葉集の才媛として知られた「額田王」の歌が思い出される。〈君待つと吾が恋ひ居れば吾が屋戸の簾うごかし秋の風吹く〉額田王が天智天皇を慕って詠んだ歌という。斎藤茂吉は『万葉秀歌』の中でこの歌の結句、

推測出来る。

そういう生活の中にあつて、掲出句に見られる作者の心境はみごとだ。「清けき夕べ」には、自らの置かれた日常を肯定する思いが前向きに出ている。それはまた、作者を支えるご主人の協力あつてのことである。

早乙女の田水に映す薄化粧

廖 運藩

一読なつかしさの込み上げる句だ。

「早乙女」とは何と若やいた凜々しい言葉だろうか。私たちの日常にはそういう言葉がまだ存在するのだ。それを私たちはありふれた言葉として、表現の対象から外しているのではないのか。この句を見ると、それらのことを、国籍の異なる作者から指摘されているような思いがする。

「田水に映す薄化粧」が現代的であり可憐だ。

日盛に睫の落とす影のあり

川崎真樹子

昭和初期の俳壇に、トリビアリズム（瑣末主義）という俳句論争が興つた。事象の本質を探求するよりは、末梢的な事柄に拘泥する表現を難じたものだった。しかし本来俳句の表現は、瑣末膨大を含む自由なものであるべきだ。要となるのは、一句の内容である。

掲出句、「睫の落とす影」はまさに瑣末である。しかしこの句をトリビアリズムと非難する人はいないだろう。一句に

流れるものは、「日盛」の抒情であり、それを「はかなき夏のひかり」と受取る作者の感性である。

山法師が綺麗よと妻二階から

石田 康明

透き通つた明るさの句である。山法師は最近庭木として栽培されている。よく剪定された山法師、仰ぎ見るより見下ろしの方が鑑賞には良い。まさに「二階から」だ。

上五中七の呼びかけが、下五の口語調に巧みに収斂されていて、表現としてもよく纏まっている。「妻」の据え方も良い。繰り返すが明るい句だ。この句、六月本部句会に出句された。

美しき日本語ばかり樟茂る

木村みどり

今年の六月、編集部、事務局の有志で、春燈台北句会を訪ねるという会が持たれた。鈴木直充編集長を中心に皆さんとの交歓も持て、短い時間ながら実りある会だった、とあとで聞いた。

現在春燈誌に出句している台北の人たちは、廖運藩、呂秀文、呉文宗、陳妹蓉、呉佳君、徐世俊の皆さん。揃つて「美しき日本語」を使っている。翻つて私たちは、「日本のことば」をいささかなおざりにしていないか。俳句はもともと日本語を大事にする詩歌である。俳句ある限り日本語は崩れない。掲出句、作者の驚きが新鮮だ。